

自著を語る：『レオンの「960年聖書」研究』

中央公論美術出版、2017年、本文416頁

毛塚 実江子

スペインの古都レオンのサン・イシドーロ王立参事会聖堂に所蔵されている960年の年記をもつ聖書（Archivo Capitular de la Real Colegiata de San Isidoro de León, Cod. 2、以下『960年聖書』）は、挿絵入り大型聖書写本として初期中世キリスト教美術を代表する作例である。本著は2009年に早稲田大学に提出した博士学位請求論文をもとに大幅に加筆、修正を加えた。『960年聖書』のモノグラフ研究であると同時に、新たな視点から挿絵群を分析し、制作者の意図に迫る試みである。

『960年聖書』は旧約・新約を一冊にした一巻本聖書である。120点余りの豊富な挿絵と、古ラテン語が混交する古いテキストにより、美術史や聖書学においても重要視されている。その一方で、同聖書はテキスト、挿絵ともに未解決の問題が多い。1960年代から本格的な美術史研究も始められたが、類例の少なさからあまり進展せず、いまだに挿絵の主題選択基準も不明である。本著では可能な限り多様な方法での挿絵解釈を試みた。その主な成果として以下の3点が挙げられる。

まず、同聖書に含まれる特徴的な挿絵を再解釈した点である。とくにいままで看過されてきた新約聖書の4点のパウロの肖像を分析し、巻頭の「マイエスタス・ドミニ」（f.2）と他の新たに追加された「書誌目録」（f.4v）、巻末の「オメガ」（f.514）を含む挿絵間の複数の共通モチーフを指摘した。それにより、先行研究においては、挿絵プログラムの存在自体が疑問視されてきた同聖書に、制作者の意図による全体的な構成を読み取ることができた。次に、挿絵数の大多数を占める旧約聖書部分の図像を分析し、共通する型が存在した可能性を指摘した点である。これによって挿絵の場面選択の基準が主題と形態から考察されることが指摘された。最後は対観表研究である。同聖書の対観表の分析により、装飾とみなされていた福音書記者像に福音書の内容を反映した解釈を加えた点である。さらにそれらの対観表の数字を周辺の聖書作例と比較し、その配置からテキスト伝播系統に新たな影響関係が示唆されることを指摘した。

各章の構成は以下である。第一章では『960年聖書』の挿絵とテキストの諸問題と、周辺の聖書写本を取り上げた。第二章では、同聖書の旧約聖書挿絵を分析し、第三章では初期中世写本に対象を広げて対観表装飾の展開を見た。第四章では『960年聖書』の対観表の装飾を福音書と関連させて論じ、第五章では同対観表の章句番号を分析した。第六章では『960年聖書』の奥付に記された二人の制作者フロレンティウスとサンクティウスの師弟のうち、師のフロレンティウスによる他の写本作例と同聖書の挿絵を比較した。第七章では新約聖書のパウロ書簡に置かれたパ

ウロの肖像を分析した。第八章では「オメガ」の挿絵と写本全体の挿絵を考察した。以下は各章ごとの細かな内容である。

第一章では、周辺の聖書写本作例とともに『960年聖書』の来歴と諸問題を整理した。同聖書のテキスト伝承の要と見なされるペレグリヌスによる聖書は完全に失われ、直接の手本とされた943年の聖書も断簡を残すのみで、複雑な伝播経路は不明である。周辺の聖書写本作例においても挿絵が残る現存作例は少ないことが確認された。欄外註などのさらなる分析が課題である。

第二章では『960年聖書』の挿絵とテキストとの関係を改めて検討した。同写本の挿絵群は逐語的ともいうべき忠実さでテキストの内容を絵画化している。古代ローマや西ゴートからの伝統的な図像「イサクの犠牲」(ff.7,21v)や「獅子の穴のダニエル」(f.325v)をも含む一方で「イスラエル軍に戦いを挑むゴリアト」(f.118v)や、「エリシャを馬鹿にし、熊に襲われる子どもたち」(f.146v)など、先行作例が全く残されていない主題もみられた。挿絵にはパターン化された表現が多いことが明らかになった。たとえば複数回繰り返される「死」、「殺害」、「嘆き」の描写などである。これらの「型」とも呼びうるパターン化された表現は、隣接するテキストに加えて、挿絵の主題選択の契機になった可能性が指摘される。同時代のヨハネ黙示録写本挿絵との比較を進めることが今後の課題である。

第三章では、『960年聖書』の対観表と比較を行うため、先行するラテン語対観表、とくに福音書記者が装飾されたものを中心に広く紹介した。対観表は福音書写本の数だけ種類があり、装飾も十二使徒や十二星座など極めて多岐にわたる。しかし総合的に紹介されることの少ないジャンルであるため、基礎資料としてまとめた。それらの作例と比較すると『960年聖書』の対観表はその装飾や基本構造においてカロリング朝の影響を受けながら、独自の形態に編纂されていることが明らかになった。

第四章では、『960年聖書』の対観表とその福音書記者像の表現の解釈を試みた。結果として、「山上の説教」や「悪魔を退ける」などの特徴のあるキリスト伝の身振りが、福音書記者像のシンボル(人、獅子、雄牛、鷲)を活用して対観表においても表されている可能性を指摘することができた。装飾枠に埋め込まれたイザヤ書の語句「XP・XP... et emanuel (sic) nobiscom d (eu)s キリスト・キリスト...そしてインマヌエル、神はわれらとともにおられる」を見出すこともできた。これは挿絵師が写字生を兼ねるばかりでなく、教義を十分に解していることの証左となるだろう。

第五章では、対観表の番号配置に着目し、周辺の写本作例との比較を試みた。『960年聖書』におけるその並びは、同一の番号が連続した場合、降順に並べ直すなど、合理化を図ったかのような整理の後が見受けられる。それらはとくに第三と第九の対観表に顕著であった。これらはウルガタ訳聖書の対観表番号よりもギリシア語聖書の対観表番号との共通点が多いという興味深い結果となった。その対観表の元となったビザンティン系の写本との接触、あるいはシリア語聖書との共通のソースも改めて想定された。今後は、ビザンティンとの文化的な交流も視野に入れて、周辺の主要な聖書写本の対観表分析を課題の一つとしたい。

第六章では、『960年聖書』とフロレンティウスによる『大グレゴリウスによるヨブ記註解』写本（マドリッド、国立図書館 Cod.80）の「マイエスタス・ドミニ」（f.2）を比較し、類例のないとされる特徴に、新たな解釈を提示した。キリストの「日の老いたる者」のような白髪や救世主の赤い衣、福音書記者のシンボルが持つ巻物は、旧約のイメージを表し、聖書巻頭に配することで旧約聖書と新約聖書との結合が視覚的に表されるよう意図したと考えられる。

第七章では、新約聖書の唯一の人物像であるパウロの肖像（ff.459v、465v、470v、471）について、パウロ書簡のテキストの解釈も含めて説明を試みた。パウロの表現には、書簡の内容を反映し、「杯を掲げる」身振りや白髪、杖など、写本挿絵全体を通じて、視覚的に繰り返される特徴を見出すことができた。キリストとアダム、旧約の王や預言者たちが赤い衣で描かれるなどの特徴はパウロの神学、とくに同書簡で述べられる予型論にも結び付けて解釈することができる。

第八章では、巻末の「オメガ」をパウロの肖像との関連で改めて考察し、「杯を掲げる」二人の人物と植物文様や樹木の装飾に覆われたオメガの意味を再考した。また、アダムとキリストというパウロの神学概念を『960年聖書』全体の特徴的な挿絵の構成と照合し考察を加えた。

結論では『960年聖書』写本の注目すべき特徴をまとめ、改めて制作の意図に関し総合的な解釈を試み、『960年聖書』の刷新点を提示した。同聖書の構成の工夫は、巻頭挿絵と冒頭の挿絵群に描かれたキリスト像と、旧約聖書の王や預言者たちの描写によって視覚的に繰り返し表現されていることから明らかである。先行研究では説明のつかない、単に特徴的、例外的と形容された挿絵における表現が意図的な変更点と解釈された。そして、この変更には、図像の特徴から、制作の中心人物とされたサンクティウスのみではなく挿絵師として名高い師フロレンティウスの関与も想定される。これらの変更点の背景には、旧約聖書の重視、さらに新約聖書との対応関係を強調するという制作者の意図が改めてうかがえる。

『960年聖書』が制作された10世紀のイベリア半島では、多数の作例が現存する黙示録註解写本群（ベアトゥス写本）に、福音書記者の肖像やヒエロニムスによるダニエル書註解が挿入されるなど、写本挿絵は大きな転換期を迎えていた。図像やテキスト系統の共通点から『960年聖書』とこれらの黙示録写本とが近い状況にあったとされる。『960年聖書』において「書誌目録」一覧が挿入され、予型論的な解釈を可能とする図像が繰り返し描かれたこと、そしてその同聖書写本制作の背景に、旧約・新約両聖書を収める一巻本聖書が切実に望まれていたことが改めて明らかになった。

本著は、邦文での初めての同写本モノグラフ研究であり、中世初期の聖書写本の対観表研究をまとめた基礎的な内容を含む。著者にとっては『960年聖書』研究の出発点であり、数々の課題は残るものの、新しい視点による研究方法を試みられた点が最大の成果であったといえる。